

# 平成26年度愛知県学校図書館研究会高等学校部会名瀬地区研究会 第2回研究会 司書・実務担当者部会 報告

今年度の第2回の研究会を7月30日に行いました。  
例年は高等学校の図書館見学を兼ねて名瀬地区内の高等学校で実施していますが、  
今年度は中京大学の図書館を見学させていただきました。  
分科会及び講演会も例年どおり実施しました。  
第2回研究会の概要報告です。

## 1 中京大学図書館の見学



中京大学の名古屋キャンパスの図書館が新しくなり、最新の自動書庫が導入されたということで、見学させていただきました。

最初に、中京大学の概要説明を伺い、その後4つの班に分かれて、図書館の見学をしました。

中京大学名古屋キャンパスには、3つの図書館がありますが、自動書庫が導入された1号館の名古屋図書館を中心に見学しました。



自動書庫のシステムについての説明をまず伺いました。

図書館のカウンターからの入力で、貸出、返却のシステムが動きます。また、先生方は研究室から入力すれば、直接書庫が動くそうです。ただし、本を受け取るのは図書館の窓口だそうです。



実際に自動書庫の中に入りました。当日は、夏休み直前ということで、貸出、返却が多く、頻繁にシステムが動いていました。

この自動書庫には80万冊の収納ができるそうです。

本の大きさが違ったり、全集であったりと、本によって収納する場所が違うのに、どのように自動的に出し入れをするのかなどの説明を聞きました。



貴重書庫の見学もできました。

国文学関係の古書を始め、外書の古いものもあり、しっかりと空調の中で管理されていました。

どうしても、その本の値段が気になって、思わず値段を聞いてしまいました。



開架書庫には、グループ学習ができるスペースや、個室、ラーニング・スクエアなどがあり、様々な用途で図書館が活用できるようになっていました。

中京大学の学生や職員以外でも、利用者登録をすれば誰でも利用できるそうです。9:00~22:00の開館時間で、街の中にある大学として、市民にも広く開放しているとのことでした。

## 2 分科会

年間3回の研究会では、それぞれの回ごとにテーマを決めて、研究協議を行っています。  
今年度の分科会の研究テーマは次のようになっています。

### 平成26年度分科会研究テーマ

分科会	第1回研究会	第2回研究会	第3回研究会
第1分科会 図書館の充実	図書の購入・廃棄・除籍について	レイアウト、ディスプレイについて	選書について(備品・漫画・ライトノベルなども含めて)
第2分科会 図書館を利用した活動の充実	広報活動や展示について	季節行事・催事について	その他の利用について(授業等との連携について)
第3分科会 図書館の新しいあり方	読書活動の推進について(オリエンテーションの工夫等)	図書館運営と蔵書管理(コンピュータ化なども含めて)	図書委員の活用について
第4分科会 特別支援学校部会	魅力ある図書館に向けて——利用指導と環境づくり——		



各回ごとに参加する分科会を事前に連絡してもらっています。参加者は、各会のテーマでレポートを用意し、研究協議に臨んでいます。毎回、各校の工夫や苦勞が紹介され、活発に情報交換が行われ、有意義な研究協議の場となっています。

今年度から、参加する分科会以外のレポートについても資料として持ち帰れるように、全員分を用意してもらいました。

## 3 講演会

演題 「古本屋のはなしと本屋たちのとりくみ」

講師 鈴木 創 氏 (シマウマ書房店主)

### 講師 鈴木 創 氏 の紹介



今回の講師をお願いした鈴木創(すずきはじめ)氏は、名古屋の本山の交差点にある古本屋「シマウマ書房」のご主人です。書店員やフリーライターなどを経て、2006年に「シマウマ書房」を開業されました。「本と本屋の魅力を再発見しよう」をテーマに、「ブックマークナゴヤ」というイベントが2008年から行われていますが、その発足に係わり、実行委員をなさっています。昨年、愛知・岐阜・三重の古書店を取材した『なごや古本屋案内』を出版されました。この地域にゆかりの作家によるエッセイなども集録されています。大学でも、講義などをされていますが、今回は、本の持つ魅力や現代の古本屋事情などを中心に話していただきました。

## 講演の概要

### (1) 出版の現状～古本屋の仕事を選んだ理由

・新刊書店は、出版社と書店の間に取次会社(日販・トーハンなど)が入っていて、委託販売制(返品可)、再版契約(値引き不可)になっている。売れなければ戻すというシステムの中で、資金のやりくりを円滑に行っていく上でも、新刊が多く出る仕組みになっている。

・昨年度の、年間新刊点数は、8万2204点。1日あたりにすると、200冊以上になる。新刊書店では、それだけの冊数が毎日やってくることになり、売れる本と返品する本を短期間で見分けていくことになる。自然と回転が速くなる。

・古本屋の役割は、新たな本を生み出すヒント、裏付け、種になるような過去の文献・資料を持っていることである。新刊と古本は、実は見えないところでつながっている。



### (2) 「古本屋」という言葉

・古本には2種類ある。

黒い本(黒っぽい本)——新刊書店ではもう売っていない絶版本。古本屋でしか入手できない古い本

白い本(白っぽい本)——新刊書店でも売っているが、中古なので定価より安く購入できる。

後者に特化して、チェーン展開したのがブックオフである。一般的に「新古書店」と言われる。「シマウマ書房」の店名も、この2種類の本(白と黒)に由来している。

・『ぼくは本屋のおやじさん』(早川義夫・早川書店・1972年)が出た頃は、新刊本屋が成り立つ時代だった。『ぼくはオンライン古本屋のおやじさん』(北尾トロ

・風媒社・2000年)は、「ネット古書店」の登場を意味していた。ネット販売は、古書目録をネット上に公開し、手数料だけで儲かるシステムである。ネット専売に移行する本屋が急増している。「シマウマ書房」でも、売り上げの半分はネットでの売り上げ。背景には、古本屋の店主の高齢化(大半の店主が80代)があり、街の古本屋の大幅減少している。ちなみに、名古屋古書組合加盟店は、2001年に95店であったのが、2012年には45店に減っている。



### (3) 新刊書店と古本屋

・江戸時代は出版社＝本屋であった。明治時代になって、本屋が独立した。岩波書店も元来は古本屋。

・「シマウマ書房」から持ってきていただいた古本(明治時代の算数の教科書や、安城農林で使っていた養蚕の教科書)を見せていただいた。練習問題の内容が当時の文化を反映していて興味深かった。本は、物として人から人へ継いでいけるものである。

・新刊書店と古本屋の違いは、新刊書店は、売ることに特化している。だから、客は「お客様」として対応する。古本屋は、売ることも買うこともある。客とは関係性が対等である。

・論文を書くときも、新しい本を書くときも、新刊本には裏付けになる資料が無い。だから、大学からの問い合わせも古本屋には来る。

### (4) 古書組合という仕組み

・古本屋には得意分野がある。しかし、本を売る人はまとめて持ってくる(書架ごと受け取りに行く)。自分の店では扱わない本も買い取ってくる。そこで、店頭には置かない本は、古書組合を通じ

て別の古本屋に渡る仕組みになっている。

#### (5) 店舗としての古本屋

・本はネットで検索可能になった。ネット検索は、一冊の本を特定して探すが、店舗では、目の前にある本から探す。思ってもいなかった本が見つかるおもしろさがある。

・新刊書店の棚は、店員が並べるが、古本屋は自分の好みで棚を作らない。元の持ち主の持っていた塊として並べている。古本屋は透明人間のような存在である。お客さんは本を通して元の持ち主と対話している。



#### (6) 古本屋のこれから

・『「本屋」は死なない』(石橋毅史・新潮社・2011年)に、本屋とは「本を手渡す職業」とあるように、顔の見える1人1人の書店主・店員のことを「本屋」と呼ぶ。

#### (7) ブックマークナゴヤについて

・江戸時代に、名古屋の永楽堂という出版社が『北斎漫画』を出版していた。名古屋の西別院で、北斎が巨大なダルマ絵を描くライブイベントを催した。その予告のポスターが当時の書店の店頭には貼られていた。名古屋市博物館に現物がある。本屋はイベントも企画していた。

・ブックマークナゴヤは、名古屋市内の新刊書店、古書店、雑貨屋、カフェなどが参加するブックイベント。期間中にさまざまな「本」にまつわる企画が行われる。今年は、10/11～11/3に30店舗が参加して開催予定である。

#### (8) 最後に、図書館でも使えるようなアイデアを紹介してもらいました

・ビブリオバトル——すでに、多くの学校でも取り入れている。

・ブックブック交換——自分が読んだ本を持ってきて紹介し合い、本と本を交換する。

・ポップ選手権——本の紹介のポップを生徒に描かせて、それを競う。

・オリジナルカバーの作成——古くなっていたんでしまった本の表紙やカバーをオリジナルで作ってみる。

・イベントのチラシやフリーペーパーを置く——「シマウマ書房」にはさまざまなチラシやフリーペーパーが置いてあるそうです。

事前打ち合わせに「シマウマ書房」を訪ねました。

こぢんまりとしたお店でしたが、一步踏み込むと、古書のおいがしました。天井から足下まで、棚いっぱいの本で、雑然と並んでいるのですが、鈴木さんが話されていた元の持ち主の思いが感じ取れるような気がしました。制服姿の女子高生もいて、時間のあるときに、じっくりと棚を見て回りたくくなりました。

報告者：名瀬地区図書館研究会会長 日進西高等学校 北角尚治